

「主の従順」

大齋節もいよいよ受難週（聖週）を迎えようとしていきます。復活節前主日は2つの意図を持っています。第1は棕櫚の日曜日であるということ、これは主イエス様のエルサレム入城を棕櫚の葉を振って人々がお迎えした事、第2主の受難を覚える事です。つまり、熱烈な大歓迎をした人々が、何と数ヵ月後には「イエスを十字架につけて殺してしまえ」と叫んだのです。

この変わりようは一体何なのでしょう。ユダヤの人々は救い主が顕れるのを待ちました。かつてのダビデ王のように強く、雄雄しい王の到来を待っていたのでしょう。ですから、イエスがエルサレムにやってきたときは本当に救い主が来られたと思い、大歓迎をしたわけです。しかし、イエス様は馬ではなく、弱くて小さいろばに乗って来られたのです。人々は次第に主イエスが自分たちが期待していたような救い主ではないと思ってきました。私たちの世界もこのようなことが今たくさんあると思います。最初は大きな期待と信頼を寄せていたけれども、次第に自分が

当初思い描いていた事とかけ離れていることに気づくと、だんだんと最初抱いていた気持ちが薄れていき、そしてそれがいつしか失望へ、そして憎しみ、最悪の場合には殺意へと変わってってしまうのです。

本当に人間の心理は恐ろしいと思います。愛が憎しみへと変わってしまうのです。私たちはだからこそ鍛錬が必要なのだと思います。主イエス様は私たちにたくさんの事を教えてくださいましたが、その教えの中でやはり、私がこの時に大事にしたいことは、「キリストの従順」「キリストの謙虚さ」であります。フィリピの信徒への手紙2：6以下に「キリスト賛歌」というのがあります。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。主の従順を私たちは今一度心に覚えたいと思います。

（越山哲也）